

「他人事」ではない、「自分事」

ベテラン社員の労災は、20分に1回

■着実に増える「転落」・「巻き込まれ」・「熱中症」

「若い頃には当たり前のようにできた作業」でミスをしたり、

「若い頃にはできた」と油断したり無理をしたりして、

亡くなるケースが多い

2020/2/18 2:00

「労働者の高齢化が進む中、高齢ワーカーによる悲惨な労働災害は着実に増えている」と、労働当局の担当者は指摘する。

- ▼休憩室で横になっていたところ、近くにあったロールボックスパレットが倒れ、
下敷き死亡（製造業の60代）
- ▼金属部品加工の作業中、回転中の切削刃に巻き込まれて死亡（製造業の70代）
- ▼事務所の庭木の剪定（せんてい）作業中にバランスを崩し、脚立から地面に墜落して死亡（保険業の70代）
- ▼天井クレーンの操作ボタン調節のため、点検台（地上高7m）で作業、
落下して死亡（製造業の60代）
- ▼木製の足場を掛けて作業をしていた際、バランスを崩し
地上まで約9メートル落下し 死亡（建設業の60代）
- ▼フォークリフトのカウンターウエイト（装置が安定するように設置された重り）
の上に上っていたところ、ふらついて後ろ向きに倒れ、地上に転落し死亡
（貨物業の70代）
- ▼事業所内の庭の草刈りの作業中、倒れたところを発見される。熱中症によるものと思われる（広告業の80代）

これらは、この1、2年で東京・大阪で起きた労災死亡事故の一例にすぎない。

厚労省によると、60歳以上の男女が労災事故に遭った件数（今統計では10歳刻みでのみ集計）は、18年時点で10年前と比べ1.5倍に増えた。

社会の高齢化で、働く高齢者自体が増えたことが大きい。

今では、すべての労災事故のうち4人に1人が60歳以上とされ、その数は全国で3万3,000件超に上る。

単純計算で1日あたり3.3万件÷365日=約90件/日、つまりは20分に1人以上の高齢労働者が全国のどこかで事故に巻き込まれている計算だ。

目立つのは、高所からの転落による墜落死と、機械の操作ミスによる挟まれ・巻き込まれのほか、熱中症を中心とする「高温低温環境での死亡事故」だ。

偶発的な不幸な事故というよりも、「若い頃には当たり前のようにできた作業」でミスをしたり、「若い頃にはできた」と油断したり無理をしたりして、亡くなるケースが多いという。